

原発事故被害者 相双の会

連絡先

國分富夫(会長)

住所

〒965-0013 会津若松市堤町6-12

電話 090(2364)3613

メール

kokubunpi-su@hotmail.co.jp

事務局

鈴木宏孝 090-2909-6133(浪江)

関根憲一 090-4889-3726(富岡)

板倉好幸 090-9534-5657(南相馬)

相双の会のみなさまへ

作家 広瀬 隆

被バクが気がかり

いつも、相双の会の通信をありがとうございます。心が痛むのは、みなさんが被災者の生活を再建するために、当たり前前の賠償を請求しながら、それが事故から四年を過ぎても、いつまでも実らない現状があるからです。加えて、和解が成立する前に、多くの方が亡くなっています。このような場合、東電を“人非人”と呼ぶのが人間の慣わしでしょう。けれども、そうした声が、日本のテレビと新聞では、まったく語られません。

なかでも、みなさんが、大量の被バクを体験させられたことが、放射能の放出量から計算すると、気がかりでなりません。それは、遠い東京に住む私自身でさえ、体調の異常を感じているのですから、医学的に対処しなければならない事態です。

皆さんに希望を見えています

けれども、みなさんがその現実と向き合っていて、闘っていらっしゃることに、私は大きな希望を見えています。なぜなら、私は1970年代に大企業の技術者であることを断念し、

医学の道に入って公害問題と取り組み始めた人間です。水俣病をはじめとする多くの患者さんと語り合い、どのようにして日本を正しい方向に歩ませるかということが、私の生涯のすべてとなりました。その時に動きはじめたのが福島第一原発でした。

被害者はいつも孤立させられながら、言葉を失うほど低俗なマスメディアにも、あの人たちが立ち向かったのです。そして一度、日本人は公害問題に、報道界と共に勝ちました。けれどもその時代に、原子力だけが、野放しになったのです。それ以来、私にとって最大の問題が「原発の打倒・廃絶」となりました。

放射能被害を知る人が味方

全世界の放射能被害者を調べました。その事実には、報道界も勝てません。ですからそれを広く伝える手段を模索しました。私たちは、あらゆる手段で伝えました。いま現在の日本で、必死になって原発反対の行動を起こしている多くの人、過去に放射能被害について知った人たちです。その人たちが、相双の会のみなさんの、最大の

味方です。だから、これから、福島県民は一層強く立ちあがらなければなりません。東京にいる人間の無責任な発言と思わないでください。

被害者以上に強い立場はない

私たちは、一見すると四面楚歌のように感じる場合があります。しかし、それが間違いのもとです。実は、ほとんどの日本人は、問題に気づいていないのです。その“考えていない人間”に気づかせるにはどうすればよいか、みなさんが培ってきた知恵と体験をもって、考え抜いてください。被害者であるみなさん以上に強い立場はないはず。何か、いま日本人に大声で語る言葉があるはず。私もいま、必死でそれを考え続けています。どうしてこのような人間の怒りと悲しみを見捨てるなどという不条理を認められましょうか。

大変な作業の先頭に立ってください

私たちの相手は、東電だけではなく、テレビと新聞を含めた“考えていない人間”だと思います。その多数の人間たちを動かせば、問題から隠れようとしている加害者・東電を世論の前に引きずり出して、非難の大声で包囲できます。それが、私たちにはできていないように感じています。これは、福島県民だけの問題ではありません。手を取り合って、テレビと新聞を動かしましょう。

大変な作業ですが、どうか、みなさんが、その先頭に立って、社会を導いてください。ある日、まったく予測しないことが起こります。それは、奇蹟ではなく、当然、起こるべくして起こるのです。過去にも、そうでした。私たちの信念は正しいからです。

原発事故5年目の怒りーその2

先月号につづき、怒りの声を紹介します。

責任を問われない社会に 子どもの居場所はあるか 東京へ避難 H. E

あの事故から4年の月日を経たが怒りが収まったわけではありません。

声高に叩きつきたい時期が過ぎただけで、怒りは綺麗に折畳んで抽斗に仕舞われたハンカチのように、いつでも自由に出し入れできるようになっただけで

す。生活者としては異形な精神状態ですが、看過できない事態であることに変わりありません。信頼の条件を反故にしながら責任を問われない社会に、子ども達の居場所はあるのでしょうか、

その状況に異議を唱えない国に未来はあるのでしょうか。第4の権力と言われるメディアはその機能と責任を果たしているのでしょうか。

そして私達の声は足りているのでし

ようか。国民に被害の実相が伝わればこの国は変わる筈なのと思う。

将来の見通しが立たないのに帰還？

南相馬小高区から相馬市へ避難

佐藤周一

原発事故により、避難を強いられてから、家族離散、長期化する仮設住宅での健康不安、孤立、ストレス、生活再建、損害賠償等様々な問題が提起されております。

特に、除染は「一通り除染をすることが目的」のようだ。「安心して住める放射線量にすること」が第一ではないか、

インフラ復旧や住宅の改修にしても、資材や作業員が確保できるのか？医療、介護、公共サービス、教育施設、日用品や食料品などの調達先、働く場所、営農等が整わなければなりません。まったく先が読めない状況です。

その間、避難した世帯は、避難先で新しい職場を見つけ、子供たちが通学する中で、新しい仲間が増えたりして、新たな生活に慣れ、家を新築するなど第二の人生を確保し、小高区に戻ってくるのが難しくなってくると考えられます。ちなみに平成 25 年度の南相馬市内での小高区生徒就学状況は、小学校が定員 668 人に対し在籍数 180 人 27%、中学校は定員 299 人に対し在籍数 91 人 30%、と非常に少なく約 70%が南相馬市外に就学している実態です。この子供たちの多くが小高区に帰還しない限り、小高区の再生はあり得ません。

私の行政区では、津波被害による移転促進地域で移転する世帯とともに、原発施設の廃炉へ至るまでの様々な不安を抱き、移転する世帯を含めれば、残るの

は数世帯となります。行政区の存続はむずかしく、他行政区との再編・合併が考えられます。

市がいくら立派な復興計画を作っても、戻るか・戻らないかを決めるのは小高区民自身です。

先日、小高区役所の帰還へ向けたアンケートには、「帰還するかどうか未定」へ○をつけました。

薄れる帰還への気持ち

浪江町から会津若松市へ避難

K. S

避難生活も 4 年が経過し、すでに新居での生活をはじめた方もいますが、私の家は原発から 8 km のところにありますので、再び原発でのトラブルが起きたらどうしよう。廃炉まで 40 年と言っていますがそれも分からない、もともともとかかるかも知れない。そんな事を考えると、帰還する気持ちが薄れてしまいます。

これから高齢化時代を迎える私たちですから、安心、安全が第一に考えてしまいます。

故郷を奪われ離れなければならない私たちからすれば身を切られるような思いです。



「相双の会」 会報に ご意見を

是非ご投稿をいただき「声」として会報に載せたいと考えています。

匿名でもけっこうです。

電話 090 (2364) 3613 メール (國分)

kokubunpi-su@hotmail.co.jp

福島原発避難者訴訟第 10 回口頭弁論（4 月 15 日）

ズルズル引き延ばしか

本人尋問をやらないで判決ですか？

裁判官は現場検証もしないで判決ですか？

第 10 回口頭弁論は原告 3 名の被害の立証に関して本人尋問を実施することが予定されていました。

ただし、として、裁判所は当該原告 3 名の請求に関し、原告側の請求と東電側の認否がそろふことを条件にしてきた。私たち原告側は裁判所の要求通り、主張と証拠を期限通り整えました。しかし東電は、期限に少し遅れて書面を提出した。

裁判所は 4 月 9 日になって主要争点について整理ができていない事を理由に本人尋問はやらないと通告してきた。

怠慢もいいところです。私たちは本人尋問を実施し的確な判断をくだす事を期待していました。訴訟を起こして 3 年になるが本人尋問にまだ入らないのである。ズルズルと先延ばししているように思われてなりません。

原告団、若い人ばかりではありません。高齢者も多くいます。早くしないと生活再建もできず死んでしまいます。

必ず勝つ

私たちの闘いは原発事故により被害を受けたものは全て被災者なのである。

帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域の線引きは被災者の分断そのものである。それを東電は悪用しようとしている。裁判所もまた私たちに揺さぶりをかけています。

この裁判闘争は原発から後世を守る。負の財産を残さない闘いであります。

二度と福島のような思いを全国の皆さんにさせたくありません。

放射能から子供を守る講演会

《低線量放射線被ばくの影響》



講師：今中 哲二 氏（京都大助教）

と き：2015（平成 27）年 5 月 24 日（日）

午後 1 時 30 分～4 時 00 分

ところ：サンライフ南相馬（原町区小川町 322-1）

参加費：無 料

主 催：「原発いらない」放射能から市民を守る会

一人ひとりが放射能の危険性を考えなくてはならない時代。判断材料を示すのが、科学者としての務めです。

チェルノブイリ、JCO、原発事故を常に間近で見してきました。3.11 後真っ先に飯舘村に入り、放射能汚染の調査を現在も続けています。